

昨年一月に放送された「NHKスペシャル 無縁社会・無縁死三万二〇〇〇人の衝撃」という番組は、年間三万数千人の人々が、この一見豊穡な日本で、だれにも看取られないまま死亡しているという事実を報道した。それが本当に衝撃であったことは、番組が昨年の菊池寛賞を受賞し、無縁社会という言葉がユークキャン新語・流行語大賞のベストテンに入賞したことで証明されている。

無縁社会に対比される有縁社会を英語でコミュニティと表現することがある。この語源は「一体になる」を意味する「クム」と「相互に贈物を交換する」を意味する「ムーヌス」を合成したものであり、普段から贈物を交換するような親密な関係にある仲間を表現する言葉である。家族や一族という単位で狩猟などをしながら移動して生活していた時代には、その関係は「血縁」によって維持されていた。

主要な生業が狩猟から農業に移行すると、人々は田畑の周辺に定住し、種蒔きや刈入れで共同作業する仲間が形成され、土地を基本とする「地縁」が社会を構成する時代が登場した。さらに工業製品を生産し、流通させる仕事が産業の中心になると、多数の人々は工場やオフィスに通勤するようになり、住居を中心とする「地縁」が稀薄になる一方、親密な仲間は職場の同僚となり、「職縁」が社会の根幹を構成する時代になった。

この構造は社会の必然の変化であるが、問題が登場した。長寿と定年である。狩猟社会である縄文時代の平均年齢は一五歳、農業社会である江戸時代は三六歳という程度であるから、大半の人々は仕事が現役のまま人生を終了していたが、現在は男性で七九歳、女性で八六歳という世界有数の長寿国家になるともに、就業者数の八割が企業に雇用されて給与を受領するという、定年のある人生で生活する時代になった。

単純な分析であるが、定年から平均寿命に到達するまでの二〇年間ほど、仲間組織がなくなる構造が無縁社会出現の原因である。この問題の解決のためには定年延長など社会制度の変革も必要であるが、基本は個人の努力により、「職縁」以外の有縁を用意することである。趣味の仲間の「遊縁」もいし、ボランティア活動の仲間の「奉縁」もいし、社会全体で推進する価値があるのは情報社会を背景にした「通縁」である。

現在『ソーシャル・ネットワーク』という題名の映画が話題になっている。アメリカの若者が創出したインターネット内部の仲間組織「フェイスブック」を題材にした映画であるが、その仮想組織に世界全体で六億人近い人々が参加している。大半のインターネット内部の仮想組織は仮名で参加可能であるが、「フェイスブック」は実名を原則としている。ネットワーク内部に現実社会を移行させたということになる。その統計によると、利用している人々の七割はアメリカ以外、利用言語は七〇以上、ほぼ半分が毎日利用している。そして重要な特徴は一人が平均して一三〇人の友人をネットワーク内部で獲得していることである。現実の社会で何日かに一回は情報交換する友人が一〇〇人も存在することは例外であり、まして定年以後では希有のことであるが、その希有な社会がネットワーク内部には実現しているのである。

日本の参加者数は三〇〇万人程度と少数で、これは言葉の障害があると推定される。そのような人々には「mixi」など国産のソーシャル・ネットワークも利用可能である。コンピュータが障壁という人々には、「フェイスブック」利用者数の三五％は携帯電話からという数字もある。長寿と定年がもたらす無縁社会の解決に「通縁」は重要な解決手段になる。